

児童・生徒の生活時間構造と家事労働参加 —東京都世田谷区在住児童・生徒の調査をもとに—

堀内 かおる

Boys' and Girls' Use of Time and their Participation in Housework.
—Based on Research from Setagaya Ward, Tokyo, 1990—

Kaoru HORIUCHI

This study was related to the movement of the equality of the sexes given at the U.N., making clear the present situation of boys' and girls' housework participation in Setagaya Ward, Tokyo.

The results showed the differences between boys' and girls' housework participation based on a questionnaire about housework and general use of time.

They thought that the personal care was what they had to do, but felt they didn't have to cook, wash or mend clothes.

In order to reach a society where fixed sex roles will dissolve, men and women will have to share the responsibilities of household duties. To do this we need to educate pupils and students in the importance of equality between the sexes. Home economics must be the basis of education for equality of the sexes, and we must promote boys and girls to participate in housework in order to help realize equality of the sexes at home.

I 緒 言

国際婦人年(1975)を始まりとする「国連婦人の十年(1976~1985)」の過程で、1979年に国連が採択した「女子差別撤廃条約」が、わが国でも1985年に批准された。その後現在にいたるまでの国際的な趨勢において、政府、地方公共団体のレベルでの女性の地位向上に関する各種の施策が試みられ、21世紀の家庭生活のありようが模索されている。

性別役割分業の固定化の解消・家庭責任は男女がともに負うという国際的合意へ向けて、現状の問題点を指摘し、改善すると同時に、21世紀の社会の担い手となる現在の児童・生徒に対して男女平等教育を行うことは、重要な課題である。筆者はこれまで、学校教育における家庭科教育のあり方について、主として学習に対する児童・生徒の意識や実態の側面からの検討を行ってきたが、1989(平成1)年の学習指導要領の改定によって、家庭科教育に大きな変革がもたらされたことは、男女平等教育をすすめる上で特筆すべきことである。すなわち、中学校技術・家庭科の領域である「木材加工」「電気」「家庭生活」「食物」は、男女を問わずすべての生徒が共通に

履修する領域となり、これまでは女子のみ必修であった高等学校の家庭科は、「家庭一般」「生活技術」「生活一般」の3つの科目の中の1つを、すべての男女生徒が必修で履修することになった。

家庭科教育の歴史をふりかえってみると、家庭科は、『学習指導要領 家庭科編(試案)昭和22年度』において「民主的家庭建設の教科」として位置づけられていた。この「民主的家庭」については朴木が述べているように、性別役割分業観に基づくものであったことは否定できない(朴木 1990)。しかし本来、家庭科は家庭生活における家事処理技術の習得を目的とする以上に、男女ともに一人の生活者としての主体的な「生き方」を学習する教科としての役割を持つものと筆者はみなしている。その意味からも、国連および関連機関が主導して、地球的規模で男女の平等が問われている今日、すべての男女児童・生徒が家庭科を学習することには大きな意義があるといえよう。

一方、現実の家庭生活場面に目を向けると、児童・生徒の基本的な生活習慣・生活技術の習得が不十分であることが指摘され(村山他 1983 a, 日本家庭科教育学会

1985, 谷田貝編著 1986, 新福他 1988, 福武書店教育研究所 1990 b), 家事労働をはじめとする児童・生徒の生活経験の不足が危惧されている。川合は、「人間は、その生活現実をより人間にふさわしいものにするために、環境である対象について学習できる存在」とみなし、児童・生徒にとっては「生活そのものが学習であり、発達でもある」ととらえている(川合 1990, pp.61~62)。児童・生徒が、家庭責任を果たし得る存在として成長するためには、彼らが「生活そのもの」のなかに、自らの役割を見だし、主体的に家庭生活に関わる習慣が形成されていく必要がある。したがって、児童・生徒が単なる「手伝い」としてではなく、主体的に「家事労働参加」をすることが重要となり、児童・生徒の「家事労働参加」が各家庭のなかに根ざしたのものになることは、家庭科教育においても志向されている「家庭における男女平等」へと一歩近づくことにつながるのである。

本研究は、以上のような視点に基づいて義務教育期の児童・生徒に対する調査を行い、児童・生徒の生活の実態を生活時間の側面から把握するとともに、児童・生徒の家事労働参加の現状について分析を試みたものである。本章に続き、第II章においては、本調査の前提となった先行研究と本調査の方法について、第III章においては調査対象者の特徴について述べ、第IV章では調査結果について考察を加えている。その手順としては、①児童・生徒の生活時間構造をとりあげ、平日、土曜日、休日の順に詳述する、②平日放課後の児童・生徒の男女別の生活時間帯別主な生活行動行為者率に着目し、相違点および類似点を明らかにする、③児童・生徒の家事労働参加をとりあげ、その実態と家事労働に対する意識から得られた結果に基づき、現状の問題点の指摘を行う、という段階をふんだ。V章は、本報全体のまとめとして、明らかにされた事柄を要約し、今後の課題を提示している。

II 先行研究および本研究の調査の枠組・方法

NHKが1941(昭和16)年に行った生活時間調査によると、平日に小学校第5学年児童が仕事と家事労働に費やした時間は、男子1時間21分、女子1時間42分である(NHK 1990)。このデータは、家事労働のほか勤労奉仕や学校の当番等の仕事を行った時間の合計値としてだされているため、単純に比較は行えないが、戦後、NHKが行った生活時間調査のデータにみられる小学校高学年児童の家事労働時間(全員平均)が、1975(昭和50)年で20分、1985(昭和60)年で18分という値を示しており(堀内 1991)、1990(平成2)年には16分となっている

(NHK 1991)ことからすると、今日の児童が家事労働や生活の中で行われる仕事に携わる時間は、大きく減少したといえる。

児童・生徒を対象とした生活時間調査は、新垣ら(1980, 1983)や阿部(1985)、瀬沼(ら)(1989 a, 1989 b)によっても行われている。このほか、子どもに関する調査を行う中で、生活時間の実態に着目し、質問紙調査の内容として生活時間を取り上げているものもみられる(福武書店教育研究所 1990a)。なお、筆者は既に児童・生徒の生活時間構造の詳細な分析を試みる場合の留意点として、①「遊び」は大人のレジャー活動とは区別して考える、②家事労働の分類は、実際に実行可能な具体的な内容にする、③「学校での生活」と「家庭・地域での生活」に二分して考える、④各学校段階ごとに、学年別・性別の集計を行う必要がある、という以上4点の指摘を行ってきた(堀内 1991)。

1日24時間という限られた時間の使われ方をみるときの視点によって、調査の結果得られたデータの分析は、おのずから異なるものになるが、児童・生徒の家事労働参加に関する研究で、生活時間の量的・質的な分析と家事労働に対する意識を関連させた研究は、みられない。したがって本研究においては、特に、児童・生徒の家事労働時間に着目したいと考え、調査を計画、実施することにした。

東京都世田谷区において、1990年度内に昭和女子大学の研究グループによる研究が2つ行われた(昭和女子大学女性文化研究所 1991, 天野他 1991)ことに関連させ、本調査においても調査対象小・中学校の選定にあたっては、東京都世田谷区に限定した。調査対象児童・生徒は、東京都中学校技術・家庭科研究会会長で、調査当時、東京都世田谷区立太子堂中学校校長、現在同区立山崎中学校校長の木崎康男氏の助言を得、東京都世田谷区立小学校3校の第5・6学年男女児童合計199名、同区立中学校3校の第1・2・3学年男女生徒合計254名、総計453名とした(表1)。

使用した調査票は、平日・土曜日・休日の3日間にわたる生活時間調査(図1)と、家事労働参加に関するアンケート調査(図2)からなり、各学校を通して児童・生徒に配付し、家庭に持ち帰らせて記入させたのち、再び学校で回収するという方法をとった。生活時間調査は、総務庁「社会生活基本調査」における生活時間調査の手法により、15分単位で、あらかじめ分類しておいた生活行動の中から主に行った行動の一つを選択させ、生活時間票にその活動を行った時間帯を矢印を記入する、という

児童・生徒の生活時間構造と家事労働参加

---いつしよにした人---
 アイウエオカキ
 父母きようだい
 祖父母だち
 祖友ち
 友だち
 他の人 ()

---家事手伝いの種類---
 アイウエオカキクケコサシスセソタチツテ
 調理をす
 食器を並べる
 食器を流しへ運ぶ
 食器を洗う
 室内のそうじ
 ゴミ収集日のゴミ出し
 新聞をとってくる
 ふとんのあげおろし・ベッドメイキング
 せんたく
 せんたくものほし
 せんたくものをとりこんでたたむ
 くつ(うわばきなど)を洗う
 アイロンかけ
 靴タンづけやかんたんつくり
 日用品の買い物(おつかい)
 きょうだいの世話
 老人の世話
 ペットの世話
 その他 ()

生活行動	12:00			13:00			14:00		
	15	30	45	15	30	45	15	30	
1 すいみん									
2 身の回りの用事									
3 食事									
4 通学									
5 学校での勉強・活動									
6 移動									
7 遊び・趣味(だれと・何を)									
8 交際・つきあい									
9 家庭での勉強									
10 塾・習いごと(何を)									
11 両親・家族の話し合い(だれと)									
12 家事手伝い(何を)									
13 新聞・雑誌・マンガを読む									
14 本を読む									
15 テレビ									
16 ラジオ									
17 その他の活動									

図1. 生活時間調査表 (部分)

家事手伝いの内容

1 調理をする
2 食器を並べる
3 食が終わった食器を流しへ運ぶ
4 食器を洗う
5 室内のそうじ
6 ゴミ収集日のゴミ出し
7 新聞をとってくる
8 ふとんのあげおろし・ベッドメイキング
9 せんたく
10 せんたくものほし
11 せんたくものをとりこんでたたむ
12 くつ(うわばきなど)を洗う
13 アイロンかけ
14 靴タンづけやかんたんつくり
15 日用品の買い物(おつかい)
16 きょうだいの世話
17 老人の世話
18 ペットの世話
19 その他 ()

1. あてはまるところに1つ○を付ける

よくする	ときどきする	あまりしない	ぜんぜんしない

2. 理由を1つ選んで○印を付ける

自分でやるべきことだから	家事がすぎだから	「しなさい」といわれるから	家族に協力したいから	自分のやるべきことではないから

家事がきらいだから

しなくても何もいわれないから	家族がしてしまいうから	時間がいないから	する必要がないから

図2. 家事労働参加に関する質問紙 (部分)

表 1. 調査対象者数・有効率

学校 段階	配付数	回収数	有効数			有効率	
			性別	アンケート	生活時間調査	アンケート	生活時間調査
小5	107	100	男	48	39	100.0%	78.0%
			女	52	39		
小6	100	99	男	49	44	100.0%	85.9%
			女	50	41		
中1	109	105	男	54	38	100.0%	76.2%
			女	51	42		
中2	69	53	男	21	11	92.5%	64.2%
			女	28	23		
中3	124	96	男	51	26	99.0%	57.3%
			女	44	29		
合計	509	453	男	223	158	98.9%	73.3%
女	225	174					

プレ・コードによる方式を用いた。したがって、各生活行動における生活時間量の合計は、1日24時間となる。調査実施期間は、1990（平成2）年10月～11月である。

III 調査対象者の特徴

第1に、調査対象児童・生徒の居住地域について述べる。

東京都世田谷区は5つの地域に大別されるが、本調査対象児童・生徒は、主に世田谷・玉川・砧の3地域に居住している(図3)。世田谷地域は区内で最も商店数が多く、事業所の集積している地域である。玉川地域は、持家比率が最も高く、地価は住宅地・商業地ともに区の平均以上である。砧地域は、公共借家、給与住宅、木造の設備専用の民営借家の占める割合が、区全体に比して高率であり、また、地域活動の盛んな地域である(世田谷区 1987)。

第2に調査対象児童・生徒の家族構成は、約7割が核家族となっており、このうち調査対象者(児童・生徒)とその父母のみのいわゆる一人っ子の家族は、小学生5.5%、中学生5.6%を占めている。平均家族員数は、小学生4.5人、中学生4.6人である。

第3に、児童・生徒の父母の職の有無・勤務形態をみると、小・中学生全体の傾向として、父親の約8割は常勤で雇用されており、約1割が自営業である。母親は、常勤が約3割、パートが約2割、自営業が約1割となっている。総務庁統計局が母の日にちなんでまとめた日本の母親に関するデータ(総務庁統計局 1991)によると、

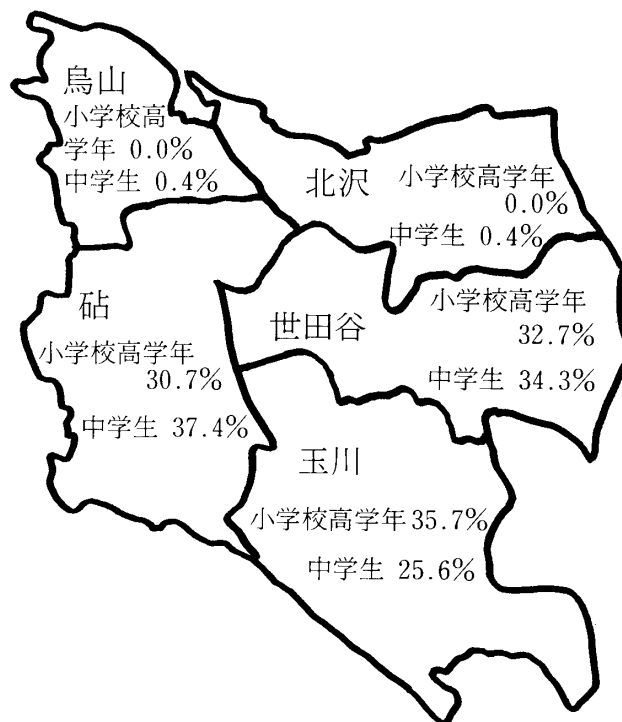


図 3. 世田谷区内の居住地別調査対象児童・生徒の比率

18歳未満の子どもを持っており、末子の年齢が7～14歳の母親の就業率は、65.0%である。本調査における母親の就業率は64.5%となり、類似した傾向を示している。

IV 結果および考察

1 平日・土曜日・休日の生活時間構造

表2に、平日、土曜日、休日の児童・生徒の生活時間を示し、順をおって1日の生活時間構造をみていくことにする。

(1) 平日

児童・生徒の平日の活動時間の大半を占めているのが、学校での勉強・活動である。全体的にみて、児童・生徒は約7時間～8時間の時間を学校で過ごしていることになる。最も長時間を学校で過ごしているのは、男子・女子ともに中学校第2学年で、8時間をやや上回る。まさに、勤労者の労働時間に匹敵する時間が、児童・生徒にとっての学校での生活時間であるといえよう。その他の活動時間では家庭での勉強、塾・習いごとに合わせて約2～3時間あまりの時間をかけている。学校から帰宅後の遊びの時間は、最も長時間の小学校第5学年の男子でさえ、1時間にも満たない。学校での勉強・活動のなかに、放課後の学校での遊びやクラブ活動なども含めてい

児童・生徒の生活時間構造と家事労働参加

表2-1. 平日の児童・生徒の生活時間 (単位：時間、分)

平日生活行動	小 学 校				中 学 校					
	第5学年		第6学年		第1学年		第2学年		第3学年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
睡眠	8.57	8.48	8.47	8.24	8.28	8.02	8.12	7.57	7.39	7.26
身の回りの用事	0.39	0.51	0.32	0.55	0.38	1.05	0.31	1.20	0.31	0.54
食事	0.46	0.55	0.47	0.56	0.49	0.46	0.49	0.49	0.57	0.55
通学	0.31	0.32	0.32	0.33	0.46	0.43	0.42	0.40	0.32	0.34
学校での勉強・活動	7.07	7.10	7.21	7.28	7.37	7.58	8.07	8.01	6.57	7.04
移動	0.21	0.25	0.12	0.19	0.18	0.17	0.22	0.13	0.11	0.21
遊び・趣味	0.57	0.40	0.38	0.32	0.43	0.13	0.12	0.13	0.39	0.23
交際・付き合い	0.03	0.03	0.00	0.00	0.02	0.00	0.00	0.13	0.00	0.03
家庭での勉強	0.55	0.49	0.54	1.37	0.54	1.08	0.52	1.02	2.49	1.23
塾・習いごと	1.11	0.53	0.52	1.01	1.21	0.49	0.58	0.29	0.57	1.21
団楽・家族の話し合い	0.19	0.20	0.06	0.10	0.09	0.15	0.06	0.18	0.12	0.21
家事手伝い	0.09	0.17	0.08	0.14	0.06	0.25	0.02	0.33	0.07	0.20
新聞雑誌マンガを読む	0.10	0.08	0.20	0.13	0.17	0.05	0.09	0.08	0.21	0.15
本を読む	0.10	0.08	0.08	0.15	0.04	0.03	0.20	0.01	0.17	0.12
テレビ	0.55	0.48	1.33	0.46	1.16	1.05	1.55	0.57	1.18	1.16
ラジオ	0.03	0.02	0.03	0.00	0.04	0.02	0.00	0.00	0.05	0.10
その他の活動	0.47	1.12	1.07	0.37	0.28	1.04	0.43	1.06	0.28	1.02
合計	24.00	24.00	24.00	24.00	24.00	24.00	24.00	24.00	24.00	24.00

表2-2. 土曜日の児童・生徒の生活時間 (単位：時間、分)

土曜日生活行動	小 学 校				中 学 校					
	第5学年		第6学年		第1学年		第2学年		第3学年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
睡眠	8.49	8.38	8.56	8.21	8.35	8.03	8.13	7.50	7.52	7.34
身の回りの用事	0.46	0.50	0.44	0.54	1.00	1.01	0.32	1.03	0.48	1.00
食事	1.12	1.33	1.16	1.22	1.10	1.16	1.02	1.02	1.15	1.35
通学	0.36	0.35	0.30	0.32	0.39	0.43	0.49	0.38	0.35	0.33
学校での勉強・活動	4.22	4.37	4.30	4.39	4.38	6.02	5.20	5.48	4.10	3.58
移動	0.33	0.27	0.20	0.24	0.39	0.11	0.26	0.11	0.25	0.31
遊び・趣味	1.56	1.50	1.56	1.42	2.07	0.54	1.39	0.46	1.34	1.18
交際・付き合い	0.00	0.20	0.08	0.07	0.04	0.07	0.00	0.29	0.00	0.07
家庭での勉強	0.56	0.47	0.44	1.21	0.49	0.49	0.26	0.29	2.32	1.36
塾・習いごと	1.13	0.46	1.01	1.21	0.40	0.23	1.16	0.48	1.23	1.16
団楽・家族の話し合い	0.17	0.16	0.06	0.14	0.09	0.19	0.03	0.14	0.12	0.12
家事手伝い	0.12	0.22	0.13	0.20	0.18	0.31	0.01	0.12	0.22	0.29
新聞雑誌マンガを読む	0.17	0.12	0.25	0.12	0.14	0.20	0.17	0.28	0.15	0.29
本を読む	0.11	0.17	0.11	0.25	0.18	0.11	0.33	0.00	0.13	0.05
テレビ	1.30	1.01	1.50	1.04	1.53	1.34	2.01	1.36	1.38	1.48
ラジオ	0.06	0.00	0.02	0.00	0.04	0.05	0.03	0.06	0.01	0.04
その他の活動	1.04	1.29	1.08	1.02	0.43	1.31	1.19	2.20	0.45	1.25
合計	24.00	24.00	24.00	24.00	24.00	24.00	24.00	24.00	24.00	24.00

表2-3. 休日の児童・生徒の生活時間 (単位：時間、分)

休日生活行動	小 学 校				中 学 校					
	第5学年		第6学年		第1学年		第2学年		第3学年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
睡眠	9.51	10.12	9.54	9.35	10.37	9.58	9.38	10.15	9.16	9.26
身の回りの用事	1.01	1.05	0.49	1.16	0.55	1.21	0.44	1.11	0.41	0.59
食事	1.19	1.40	1.39	1.29	1.20	1.20	1.28	1.19	1.22	1.34
通学	0.00	0.01	0.00	0.01	0.05	0.03	0.06	0.00	0.00	0.00
学校での勉強・活動	0.00	0.09	0.00	0.12	0.29	0.21	0.48	0.00	0.00	0.00
移動	1.00	0.49	1.01	0.35	0.49	0.18	0.39	0.11	0.28	0.20
遊び・趣味	2.14	1.40	2.01	2.28	2.53	2.24	2.21	1.21	1.51	1.42
交際・付き合い	0.11	0.10	0.07	0.05	0.11	0.09	0.00	0.23	0.04	0.05
家庭での勉強	1.12	0.49	1.10	2.07	1.15	1.53	0.45	1.10	3.57	2.47
塾・習いごと	1.56	0.58	2.04	1.30	0.16	0.11	0.05	0.10	1.14	0.33
団楽・家族の話し合い	0.26	0.22	0.17	0.30	0.23	0.19	0.12	0.17	0.06	0.25
家事手伝い	0.13	0.41	0.10	0.26	0.27	0.42	0.01	0.58	0.36	0.37
新聞雑誌マンガを読む	0.24	0.22	0.28	0.17	0.27	0.19	0.20	0.29	0.21	0.19
本を読む	0.10	0.15	0.05	0.31	0.07	0.10	0.12	0.12	0.39	0.03
テレビ	1.43	1.37	2.15	1.23	2.43	1.58	3.41	1.10	2.23	2.36
ラジオ	0.00	0.00	0.09	0.01	0.03	0.04	0.22	0.10	0.31	0.08
その他の活動	2.20	3.10	1.51	1.34	1.01	2.30	2.38	3.40	0.31	2.26
合計	24.00	24.00	24.00	24.00	24.00	24.00	24.00	24.00	24.00	24.00

ることを考慮しても、遊びの時間はきわめて短く、テレビ視聴時間は約1時間～2時間である。塾や習いごとに忙しい児童・生徒の姿が浮かび上がってくる。

睡眠時間は約8～9時間となっており、各学年とも男子より女子の睡眠時間が短い。団らん・家族の話し合い、家事手伝い(家事労働参加)のような家族との関わりの生じる生活行動にかかる時間は、約30分以下である。しかし、特に団らんについては、食事時やテレビ視聴時等における二次的な行動として行われる可能性が高い。本調査は「主な行動」に分析の主眼を置いているため、団らんのみを時間量としては把握できなかった面もあることが予想される。二次的・三次的な行動の分析については、今後の検討を要する。

(2)土曜日

土曜日の生活時間構造は、学校での生活時間が平日よりも約2～3時間減少する。その分、家庭・地域における生活時間が増加することになり、遊びの時間が平日よりも約1時間増加し、テレビ視聴時間も約30分程度増加する。家庭での勉強や塾・習いごとにかかる時間は平日とほぼ等しい。新聞・雑誌・漫画を読む時間は、約10～20分程度の増加の認められる学年がほとんどである。平日は、学校での給食を「学校での勉強・活動」の時間に含めていたため、正午すぎに帰宅して家で昼食をとる場合の多い土曜日の食事時間は、当然平日よりもその分増加することになる。その他の生活行動における時間量には、平日との間に大きな相違は認められない。

(3)休 日

休日になると、平日・土曜日には1日の主要な活動時間であった学校での生活時間が、クラブ活動や動物の飼育等で通学した児童・生徒を除き、ほとんど皆無になるため、全体的な児童・生徒の生活時間構造にも特色が表れる。平日・土曜日との相違を時間量の面からみていくと、全体的に生活時間の増加が認められるのは、①睡眠時間、②遊び・趣味の時間、③家庭での勉強時間、④団らん・家事手伝い等の家族との関わりの時間、⑤テレビ視聴時間等の生活行動である。遊び・趣味の時間は、増加するとはいえ、平日よりも約1時間～2時間、土曜日よりもせいぜい1時間程度の増加である。

2 放課後の生活実態

平日午後の時間帯をとりあげ、児童・生徒の放課後の主な生活行動と、その行動の行為者の占める割合(行為者率)を図4に示す。次に、各学校段階ごとの傾向について述べる。

(1)小学校高学年

男子・女子の主な生活行動の時間帯、行為者率には著しい違いは認められない。15時30分ごろ、過半数の児童が学校から帰宅し、16時頃には3割～4割の児童が遊んでいる。それから、塾や習いごとに出かけ、18時頃には約4割の児童が塾で勉強したり、習いごとをしている。

夕食の時間帯は、19時台に集中しており、テレビの視聴率も19～21時台に高くなっている。夜遅くまで家庭で勉強している児童は、むしろ男子より女子に多い傾向を示している。家事労働参加をしている時間帯は夕食の前後に見られるが、行為者は各時間帯とも、多くても1割程度にすぎない。

福武書店教育研究所が小学校第4学年～第6学年男女児童を対象に行った、児童の遊びに関する調査では、遊ばなかった理由として第1に「塾や習いごとに行った」ことがあげられている。そして、1週間のうちの6日間の放課後に予定のあった児童は13.7%、5日間13.9%、4日間17.7%である(福武書店教育研究所 1989)。このような児童の放課後の生活をみると、あたかも定められているスケジュールを時間にしたがってこなしている、というような印象を受ける。

謝名元は、1980(昭和55)年に行われたNHK国民生活時間調査のデータから、小・中学生の遊びを抽出し再集計を行い、報告している(謝名元 1983)。その結果によると、児童・生徒は曜日を問わず「遊び」の種類としてスポーツをあげており、現在の子どもの「遊び」の主流は「スポーツ」であることが指摘されている。また、「鬼ごっこ」、「めんこ」等の伝統的な遊びは、平日・土曜日では1割に満たず、日曜日で1割をこえる程度であるという。また、まったく遊ばなかった児童・生徒は日曜日で小学生の12.5%、中学生の41.4%を占める。本調査の結果においても、遊び時間の短さが指摘されるとともに、遊びの行為者の集中する時間帯の幅が、非常に狭いことが明らかである。

文部省が1985(昭和60)年に行った児童・生徒の学校外での学習活動に関する調査報告によると、週あたり平均通塾日数は、小学校高学年で2.3日となっており、平日では約4割程度の通塾者がいるという結果が示されている(文部省 1987)。この文部省の調査の中で、児童自身のあげている「学習塾に通って良かったこと」は、第1に「友達ができうれしい」ことであった。こうしてみると、児童・生徒の遊びの時間の短いことはすでに指摘したとおりであるが、「塾通い」は、児童にとってある意味で「遊び」的な要素を持つものとして、考えられない

児童・生徒の生活時間構造と家事労働参加

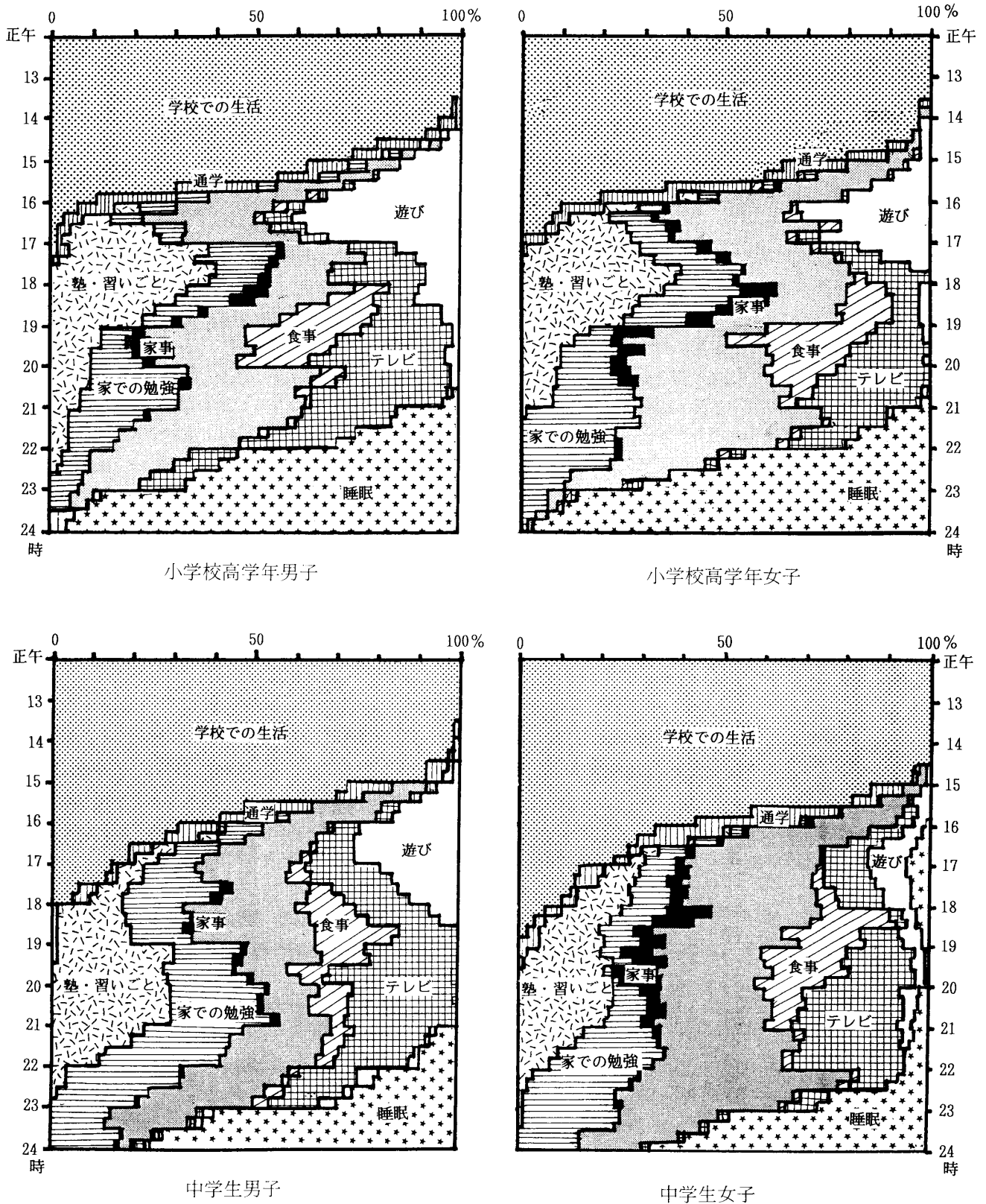


図4. 平日午後の時間帯別、児童・生徒の主な生活行動における行為者率の推移

だろうか。

(2)中学生

中学生の場合は、男子と女子では異なる傾向を示している。16時頃過半数の生徒が帰宅するが、帰宅後は男子の方が女子よりも塾や習いごとに行き、家庭でも勉強をしている。遊びについても、男子の方が高い行為者率を示している。塾・習いごとの時間帯のピークは、小学校高学年よりも約2時間ほど遅い20時頃である。

女子については、家事労働時間の集中がみられるようになる。夕食の前後と推察される18～20時にかけて、常に約1割の女子が家事労働を行っている。

小学校高学年の段階では、生活時間配分上の男女の相違は際立ったものではない。しかし、中学生になると明らかに生活行動の上で男女の相違が認められるようになる。次に、家事労働参加に関する男女の相違に視点を置き、児童・生徒の家事労働参加の分析を行った結果について述べる。

3 家事労働参加について

児童・生徒の家事労働に関する意識や家事労働参加の頻度についての調査は、既に述べた文献のほかにも、過去10年間に行われたものが多数みられる(福武書店教育研究所 1981, 1984, 米川他 1981, 村山他 1982, 1983 b, 加藤他 1984, 田結庄 1984, 日本家庭科教育学会 1984, 新福他 1986, 伊藤忠記念財団 1987, 鈴木 1987, 藤原他 1989, 友定 1990)。本研究では、これらの先行研究をふまえ、児童・生徒の家事労働参加の現状をみることにする。

(1)児童・生徒の家事労働時間の特徴

平日・土曜日・休日の、児童・生徒の家事労働時間を表3に示す。

表3. 学校段階別、児童・生徒の家事労働時間

学校段階	性別	家事労働時間(時間, 分)		
		平日	土曜日	休日
小学校	男	0.09	0.13	0.12
高学年	女	0.16	0.21	0.34
中学校	男	0.05	0.14	0.21
	女	0.26	0.24	0.46

平日の男子の家事労働時間は学年が高くなるにつれ減少しているが、女子の場合は、男子とは反対に増加する傾向を示す。小学校高学年の男子の休日の家事労働時間は土曜日とほぼ等しいが、全体的に平日、土曜日、休日の順に家事労働時間は長くなる傾向が認められる。

(2)家事労働参加の実態と意識の関連

1) 週推計家事労働行為者の家事労働参加の実態

次に、1週間のうちで少なくとも1分以上家事労働を行っている児童・生徒を「家事行為者」とし、家事行為者率を算出した結果を表4に示す。

表4. 家事行為者率

(単位: %)

学校段階	性別	行為者	非行為者
小学校 高学年	男	48.2	51.8
	女	73.8	26.2
中学生	男	45.3	54.7
	女	76.6	23.4

注) 1週間に1分以上家事労働を行った児童・生徒の割合を示す。

男女とも、小学校高学年と中学生では類似した傾向を示し、男子の約5割、女子の約7割が家事労働を行っているものとみなされる。家事労働行為者の週推計の平均家事労働時間を算出すると、小学校高学年で2時間28分(148分)、中学生で3時間15分(195分)である。

2) 家事労働参加希望の有無と家事労働参加の実態

それでは、児童・生徒は、自分の父母の自分に対する家事労働参加の期待をどのように受けとめているのだろうか。図5に示すように、各学年、男子、女子ともに約7割以上が、自分の家事手伝いを父母が期待しているものと思っている。一方、父母が期待していないと思っている児童・生徒は、その理由として、「家事よりも勉強してほしい」ということを父母いずれについてもあげている。家事労働をしたいと考える児童・生徒は比較的低率となり、家事労働参加をしたくない児童・生徒があげていた第1の理由は、「家事は面倒だから」、第2は「うまくできないから」である。

次に、児童・生徒の家事労働参加希望の有無別に生活時間調査における家事労働の実態をみることにする。

男子についてみると、小学校高学年の段階では家事労働参加を希望し、かつ実際に行っているものが最も高率を占め、希望せず行っていないものは約3割である。しかし、中学生になると家事労働参加を希望せず、行っていないものが約4割に増加する。

女子については、小学校高学年・中学生ともに家事労働参加を希望し、実際に行っているものが約5割を占めている。小学校高学年の段階では、希望しているもの実際に行っていないものが2割を占めていたが、中学生になると大きく減少し4.3%となる。男子も、女子ほどではないが小学校高学年は中学生よりも、家事労働参加を

児童・生徒の生活時間構造と家事労働参加

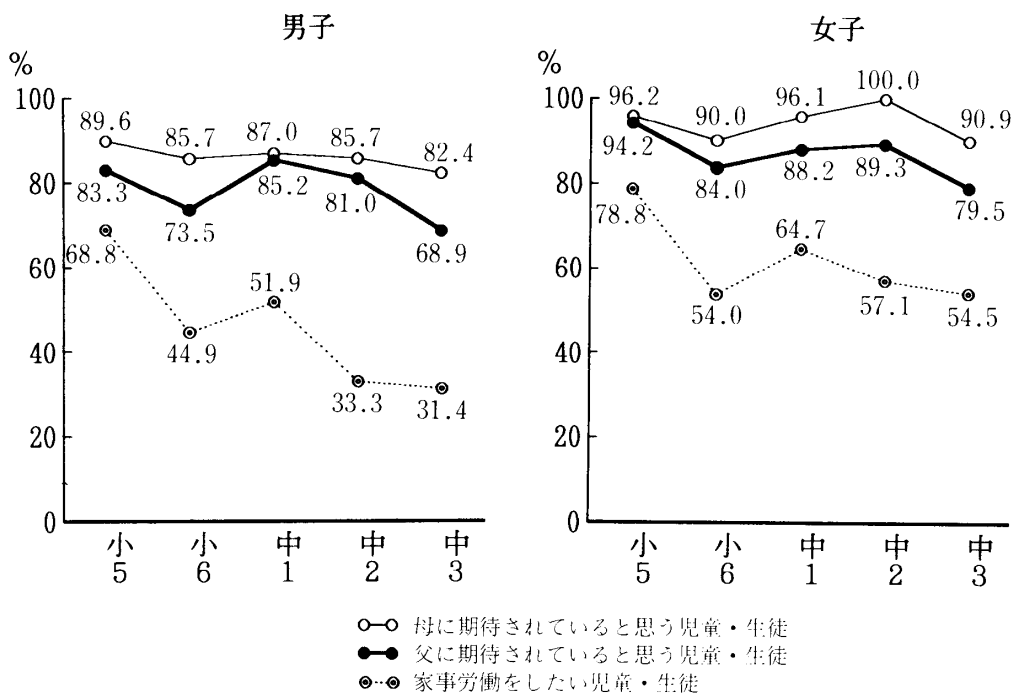


図5. 父母の期待に対する児童・生徒の認識と家事参加意欲

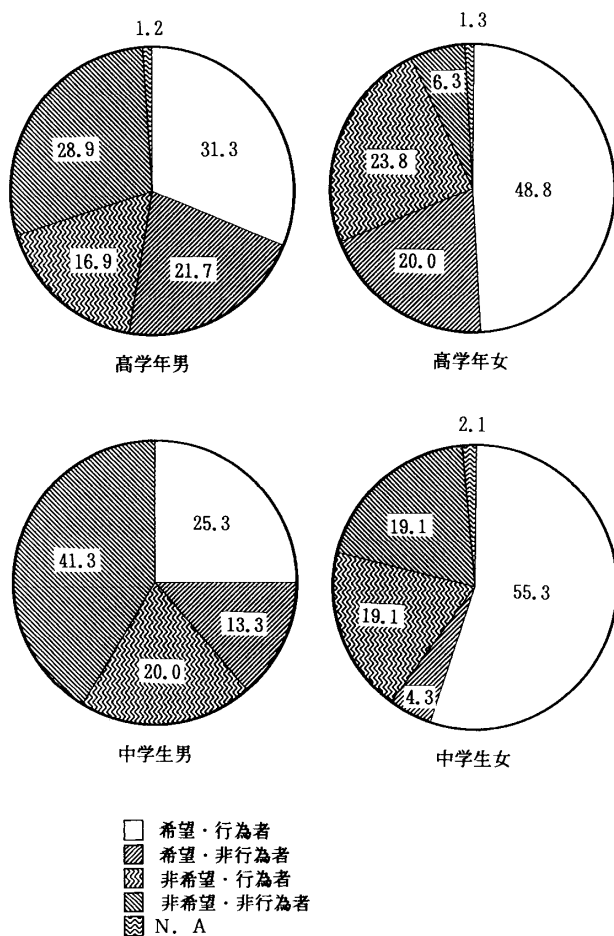


図6. 家事参加希望の有無別、児童・生徒の家事行為実態

希望しているが実際に行っていないものの占める割合が高い。このことから、家庭において家族が子どもの家事労働参加を禁止する外的な制限が、年齢にともない緩和されるものと思われる(図6)。

3) 家事労働をする理由・しない理由

児童・生徒が「自分でやるべきこと」だと考えているのは、食べ終わった食器を流しへ運ぶこと、室内の掃除、布団のあげおろし・ベッドメイキング、靴(上履きなど)を洗う、というような、自分自身の身辺処理に関することである。「自分でやるべきことではない」と考える意識は、調理、食器洗いのほか、洗濯等の被服整理に関する内容で1~2割ほどあらわれている。

家族に「しなさい」と言われる家事労働は、配膳、ゴミ収集日のゴミだし、洗濯物を取り込んでたたむこと等である。また、家族がしてしまうためにしない家事労働としては、調理や被服整理に関するものが多く見受けられ、「自分でやるべきことではない」と考えられていたものとほぼ共通している。

また、児童・生徒が家庭で家事労働をどのくらい行っているか尋ねた結果から、特徴的な傾向を示しているものとして「ボタン付けや簡単な縫い」があげられる(図7)。女子の場合、学年の高くなるのにもない、ボタン付けや簡単な縫いを行う割合の増加がみられるが、男子は一貫して行っていない。全体的にみて、ボタン付けを

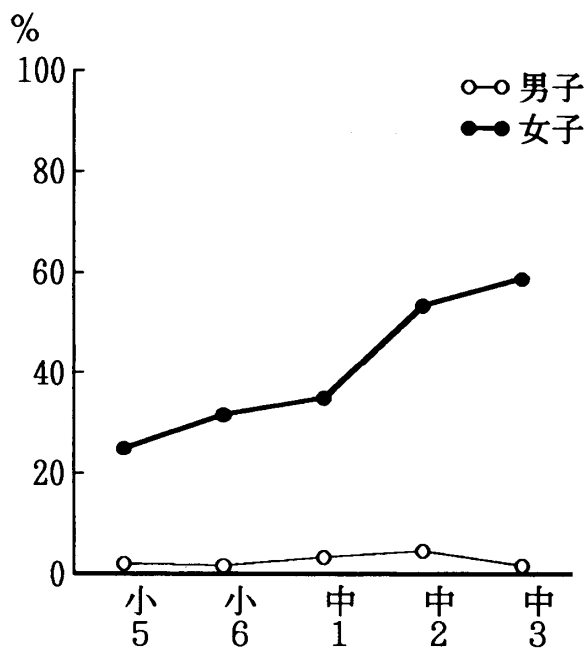


図7. ボタン付け・繕いをする児童・生徒の比率

はじめとする被服整理に関する内容を男子は行わない傾向が認められる。

藤原ら(1989)は、児童・生徒の家事労働にみられる性別役割分業観の調査を行い、「ボタン付け」、「ほころび直し」については男女とも、「女の人がすれば良い」内容であると考えている、と報告している。このような衣生活に関する内容については、特に根強い性別役割分業観に裏付けられていることが、本調査の結果においても示されたことになる。

(3)児童・生徒の家事労働参加をめぐる問題点

田結庄(1987 p.85)は、「生活主体形成に必要な家事・育児に関する知識と技術を身につけ、生活を切り開いていく能力」を「生活的自立」の概念と定義した。ここで言う「生活主体」とは、「生活の問題に自ら身につけた生活技術をもって積極的に問題を解決してゆく実践的な生活者」(宮崎・伊藤 1989, p.161)のことである。本調査の結果をみると、児童・生徒の「生活的自立」には、多くの困難な点が認められる。

「家事は面倒」なので「したくない」と考える児童・生徒に対し、子どもの嫌がることは「家族がしてしま」い、児童・生徒は、「自分のやるべきことだと思わない」ようになる。まさに調査結果は、「子どもが自分自身を生活の営みのなかに位置づけることができるような『生活参加』」(同上 p.163)が行われていないことを物語っているといえよう。

平日の活動時間の大半を学校での生活が占めており、帰宅後の塾や習いごと、そして遊び、テレビ視聴というような活動が行われる中で、児童・生徒の「生活参加」としての家事労働参加の機会を各家庭において、むしろ意図的に与える必要があるだろう。

家事労働は、「個別的家庭生活の場で、家族員の広い生命活動をも含めた労働力の再生産のために行われる、家事・育児・家政管理のための労働」と定義される(大森他 1981)。児童・生徒の家事労働参加をすすめることを通して、将来の「生活主体」の形成をめざすとともに、現在の児童・生徒自身が、自らの生活を子どもなりのレベルで「再生産」することのできる力を培うことが求められる。

大田(1991)は、「今の日本の家庭の中であって、子どもたちは、その一員として大人との間に、人としてあてにし、あてにされるような関わり方、出番を持っているだろうか」と問いかけている。児童・生徒の家事労働参加は、単に家族員の家事労働負担の軽減や児童・生徒の生活技術の習得に終始するものではなく、家族員との関わりの中で児童・生徒の人格形成上、大きな影響をもたらすものであるといえよう。児童・生徒の家庭生活のなかに、責任ある「分担」としての家事労働参加を位置づけることが重要である。

V ま と め

児童・生徒の生活時間構造と家事労働参加について調査を行った結果、以下の点が明らかになった。

- 1 現在の児童・生徒の生活時間構造の特徴として、平日学校で過ごす時間が長く、帰宅後の遊び時間が短く、塾や習いごとに行くものが多いことがあげられる。また、中学生になると、平日の午後の主な生活行動には男女差が顕在化し、特に家事労働に着目すると、男子はほとんど行っていない。
- 2 児童・生徒が家事労働をしたくない理由としてあげていたのは、「家事は面倒だから」ということである。
- 3 児童・生徒が「自分でやるべきこと」だと考えている家事労働は、食べ終わった食器を流しへ運ぶ、室内の掃除、布団のあげおろし・ベッドメイキング、靴を洗う等のように主に自分の身辺処理に関わる内容である。

家族に「しなさい」といわれる家事労働は、配膳、ゴミ収集日のゴミだし、洗濯物を取り込んでたたむこと等である。

「自分でやるべきではない」と考える家事労働の種類と、「家族がしてしまう」家事労働の種類はほぼ共通しており、調理や被服製作に関する内容のものが多くあげられる。特に、ボタン付けや繕いを行うことに対する男子の意識は低い。

児童・生徒の家事労働参加の現状を分析するにあたり、生活時間構造と意識の両面からアプローチすることによって、事実としての生活時間の実態と、その裏付けとなる心理的な内面を明らかにすることができた。本調査の結果得られたデータは、家事労働参加に関する学年および男女の相違を示している。児童・生徒の家事労働参加を規定するその他の要因についての検討は、今後の課題として残されている。

最後に、ご懇切なご指導を賜った昭和女子大学女性文化研究所伊藤セツ教授に深謝申し上げるとともに、調査にご協力いただいた方々に、感謝の意を表す。

本稿は、1991（平成3）年6月30日、日本家庭科教育学会第34回大会（会場：国立教育会館）における口頭発表原稿に加筆したものである。

引用文献

- 阿部祥子(1989)「家庭科教育における態度(手伝い)に関する研究—義務教育期における一貫校と公立校の比較—」『日本女子大学紀要 家政学部』Vol.36 pp.67-71
- 天野寛子・伊藤セツ・森ます美・瀬沼頼子・天野晴子・堀内かおる・井野上真弓(1991)「東京都世田谷区在住の夫妻の生活時間と生活様式—1990年生活時間調査から—第1報 調査対象と調査の概要、第2報 趣味・スポーツ・社会的活動と余暇享受能力、第3報 夫妻の家事責任の共同化をめぐる実態と意識」『日本家政学会第43回大会研究発表要旨集』pp.9-10
- 伊藤忠記念財団(1987)『伊藤忠記念財団調査研究報告書 13 放課後の子どもたち—子どもの郊外生活に関する研究—』伊藤忠記念財団
- NHK(1990)『国民生活時間調査(昭和16年調査)一般調査報告』第8巻 大空社
- NHK(1991)『1990年度 国民生活時間調査報告書』NHK放送文化研究所世論調査部
- 大田堯(1991)「人間性への芽つまれた子どもたち」読売新聞 1991年4月11日
- 大森和子・好本照子・阿部和子・伊藤セツ・天野寛子共著(1981)『家事労働』光生館 p.3
- 加藤悦・安藤知子・加藤とみえ・平山静子・樋口哲子・佐藤清子(1984)「高校生の家庭生活に関する実態と意識(第2報) 一家事労働について—」『日本家庭科教育学会誌』Vol.27, No.2 pp.1-6
- 川合章(1990)『人間を育てる教育 教育課程に新しい風を』新日本出版社
- 謝名元慶福(1983)「今、子どもの遊びの世界は—『国民生活時間調査』から—」『放送研究と調査』11月号 NHK放送文化研究所 pp.20-25
- 昭和女子大学女性文化研究所(1991)『女性文化研究所グループ研究<高齢化社会の進展>とあらゆる分野での<女性比重の増大化>が両性、家庭、地域、雇用にもたらす影響とその施策に関する研究<中間速報>』昭和女子大学女性文化研究所
- 新福祐子・中川兆子(1986)「児童・生徒の家庭生活への関わり方と家庭教育」『大阪教育大学紀要 第II部門』Vol.35, No.1 pp.1-29
- 新福祐子・与野留美子(1988)「児童の家庭生活基礎能力とその学習および保護者の意識」『大阪教育大学紀要 第II部門』Vol.37, No.1・2 pp.57-70
- 鈴木敏子(1987)「子どもの家事参加の実態と家政学の課題」『家庭科教育』Vol.61, No.11 家政教育社 pp.11-16
- 世田谷区(1987)『地域生活環境指標』世田谷区企画部企画課
- 瀬沼頼子・大竹美登利(1989a)「多摩ニュータウン在住雇用労働者家庭の子どもたちの生活時間」『日本家政学会誌』Vol.40, No.5 pp.327-333
- 瀬沼頼子(1989b)「子どもの生活時間と住生活」伊藤セツ・天野寛子共編著『生活時間と生活様式』光生館 pp.122-146
- 総務庁統計局(1991)「統計でみる日本の母親—『母の日』にちなんで—」総務庁統計局
- 田結庄順子(1984)「家事労働と生活的自立の教育」『鳥取大学教育学部研究報告 教育科学』Vol.26 pp.199-224
- 田結庄順子(1987)『生活主体の形成と教育』ドメス出版
- 友定啓子(1990)「小学生の家事労働における性別分業に関する意見—自由記述分析から—」『日本家庭科教育学会誌』Vol.33, No.2 pp.15-19
- 新垣都代子・花城梨枝子(1980)「Time Budgetに関する研究(II)小学生の生活時間配分(一都市)」『琉球

- 大学教育学部紀要』Vol.24 第2部 pp.135-158
- 新垣都代子・花城梨枝子(1983)「Time Budgetに関する研究(III)中学生の生活時間配分(一都市)」『琉球大学教育学部紀要』Vol.26 第2部 pp.221-233
- 日本家庭科教育学会(1984)『現代の子どもたちは家庭生活をどう見ているか』家政教育社
- 日本家庭科教育学会(1985)『現代の子どもたちは家庭生活で何ができるか』家政教育社
- 福武書店教育研究所(1981)『モノグラフ小学生ナウ』Vol.1, No.5 福武書店
- 福武書店教育研究所(1984)『モノグラフ小学生ナウ』Vol.4, No.5 福武書店
- 福武書店教育研究所(1989)『モノグラフ小学生ナウ』Vol.9, No.5 福武書店
- 福武書店教育研究所(1990 a)『モノグラフ小学生ナウ』Vol.10, No.4 福武書店
- 福武書店教育研究所(1990 b)『モノグラフ小学生ナウ』Vol.10, No.8 福武書店
- 藤原康晴・宮本寿江・阿部禎子・所康子(1989)「児童・生徒の家事に対する性役割分業意識と家事手伝いとの関連性」『日本家庭科教育学会誌』Vol.32, No.2 pp.1-5
- 朴木佳緒留(1990)「『民主的家庭建設』と家庭科」岩垂芳男・福田公子編『家政教育学』福村出版 pp.39-52
- 堀内かおる(1991)「子どもの生活時間分析の視点—NHK『国民生活時間調査』と総務庁『社会生活基本調査』をもとに—」『家庭経営学研究』No.26 pp.62-73
- 宮崎礼子・伊藤セツ編(1989)『家庭管理論 新版』有斐閣
- 村山淑子・中村よし子(1982)「家庭生活に関する児童・生徒の能力の発達(第3報)—児童の態度—」『日本家庭科教育学会誌』Vol.25, No.1 pp.15-21
- 村山淑子・中村よし子・滝沢志貴子(1983 a)「家庭生活に関する児童・生徒の能力の発達(第5報)—生徒の技能—」『日本家庭科教育学会誌』Vol.26, No.1 pp.14-20
- 村山淑子・中村よし子・滝沢志貴子(1983 b)「家庭生活に関する児童・生徒の能力の発達(第6報)—生徒の態度—」『日本家庭科教育学会誌』Vol.26, No.3 pp.27-34
- 文部省(1987)『昭和60年度 児童・生徒の学校外学習活動に関する実態調査報告書』文部省大臣官房調査統計課
- 谷田貝公昭編著(1986)『現代「不器用っ子」報告』学陽書房
- 米川五郎・村山淑子・久世妙子・中村よし子・中村喜美子・金沢扶巳代(1981)「家庭生活に関する児童の認識—家族の役割分担について—」『愛知教育大学研究報告』Vol.30(芸術・保健体育・家政・技術科学編) pp.61-80